

## 不確実性分析の勧め

--- 新型インフルエンザ N1H1 からの危機管理レッスン

国際予防医学リスクマネジメント連盟  
理事長 酒井 亮二

2009年4月24日に World Health Organization (WHO)ジュネーブ本部による新型インフルエンザ N1H1 の流行宣言に対して欧米諸国では、ウィルスの同定、病原性の同定、感染力の推定といったリスク評価にもとづき、そのリスク管理・危機管理対応システムをわずか数週間内に迅速に改変した。

他方、日本ではこのシステム改変が遅れ、一部の地域では医療整備に問題が見うけられた。この相違の原因は、リスク対策・危機管理対策の策定に当たり、不確実性分析 (uncertainty analysis)が欧米で普及していることによる、と考えます。

不確実性分析(あるいは感度分析)の目的は、将来の不確実性にシステムがどう対応すべきかを解明することです。その定義は、「リスク対策における重要な項目の上限と下限を予測し、その対策の効果の上限と下限を求める」ことです。新型インフルエンザ対策に適応すれば、予想されたインフルエンザの病原性(リスク)の信頼幅に基づき、複数のリスク管理・危機管理対応戦略を予め用意します。

不確実性分析は日本社会ではごく一部でしか行われていませんが、不測の事態はインフルエンザのみならず、医療界でも様々な事態が起きます。危機管理システム構築における不確実性分析の導入は、機敏な対応が不可欠である危機管理対策にとって大変有意義であり、広く日本医療界にも普及が必要と考える次第です。

日本の高い医学水準はアジアを含む多数の海外諸国より期待されています。より病原性の大きな感染症に対する危機管理対策として、感染症リスク調査特殊チーム(病原体同定、感染力推定、治療方法発見などを任務とする)を日本に創設し、海外現地での情報収集・医療活動を行うことは、単なる国際貢献でなく、国境なきグローバル時代における日本の危機管理対策としても不可欠ではないかと考える次第です。